

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26285143

研究課題名(和文) 世代間援助の円環モデルに基づく多世代共生型事業の開発

研究課題名(英文) Development of multi-generational coexistence programs based on the circle of care model

研究代表者

村山 陽 (Murayama, Yoh)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：90727356

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：地域における世代間援助の現状と課題を把握するとともに、世代間援助を包括的に捉えた「円環モデル」を構築し、これからの世代間援助のあり方を提案することを目的とした。結果として、日常的な非親族間の世代間援助の多くは特別な場面に限られる一方で、相手を気づかうような潜在的なサポートの存在が示された。また、世代間援助の授受には、高齢者からの被援助経験が関連しているとともに、世代性の発達を介して心理的健康および認知的SCの醸成につながるということが明らかにされた。さらに、発達段階に応じて援助の方向性が変化する円環的な関係性が見いだされた。以上の知見を基に、学際的な視点から多世代共生型事業のあり方が提案された。

研究成果の概要(英文)：The objectives of this study were to determine the current state and issues of intergenerational support, and to build the circle of care model to propose future multi-generational support program in our society. The results showed that the providing and receiving intergenerational support was related to the receiving help experience from elderly, and it has positive effects on the mental health and cognitive social capital in all generations, including developing the generativity. Furthermore, it was revealed that the direction of intergenerational support has changed depending on one's developing stages. Based on these consequences, we proposed the circle of care model and the multi-generational coexistence .

研究分野：社会心理学

キーワード：世代間援助 世代間交流 多世代共生型事業

1. 研究開始当初の背景

急速な少子高齢化が進む今日、わが国では血縁、地縁、社縁中心の従来のネットワークに限界が生じ、「無縁社会」への対応が喫緊の社会問題となっている。最近では「世代間断絶」を起因とする様々な社会問題(孤独死、介護者による虐待など)が取り沙汰されている。にもかかわらず、地域住民による理解が進んでいないため地域のサポートが受けられず、孤独死や介護者による虐待に至るケースが多々報告されている。本来、「世代間断絶」を起因とする社会問題は、育児支援の問題から高齢者の孤立まで全世代の課題が複雑に絡み合っているものであり、ゆえにこの問題の根本的な解決には学際的な共同研究に基づく戦略的な世代間援助の取り組みを検討することが必要不可欠である。

2. 研究の目的

本研究では、地域における世代間援助の現状と課題を把握するとともに、「世代間援助」を包括的に捉えた「世代間援助の円環モデル」を構築することで、「世代間断絶」の解消に向けた戦略的な世代間交流のあり方「多世代共生型事業」を提言することを目的とした。具体的に、(1)地域における世代間援助の現状と課題を抽出する、(2)「世代間援助」と心身の健康に及ぼす影響を明らかにする、(3)様々な学問分野の世代間交流研究者および地域高齢者によるワーキング・グループやインタビューにより、「世代間援助の円環モデル」の構築とともに多世代共生型事業に向けた提案をする、ことを目的とした。

3. 研究の方法

研究 1-1. 「地域における世代間援助の現状と課題」抽出および「地域における世代間援助尺度」作成

2014年7月にWeb調査会社A社に登録している20~50代300人、60~70代100名を対象に自由記述形式による予備調査を実施した。自由記述により「世代間援助提供体験」および「世代間援助受領体験」を記述させ、それぞれ想起した。相手の方の間柄について回答を求め、質的データ分析支援ソフトウェア「MAXQDA」により分類をした。次いで、本結果をもとに、「世代間交流」を専門とする有識者3人とともに「世代間援助尺度」項目案を作成した。本項目案について、65歳以上4243人(男性2864人、女性1379人)を対象にオンライン調査を行い、因子分析および項目分析により信頼性および妥当性を検証した。

研究 1-2. 世代間援助に関する初回調査

(1) 方法：埼玉県A市の20歳以上の市民から、性・年齢で層化し無作為に抽出された7,000人を対象にした郵送調査(2014年10月~11月)、川崎市B区の20歳から84歳の市民から、性・年齢で層化し無作為に抽出された2,500人を対象にした郵送調査(2015年3月)をそれぞれ実施した。

(2) 調査項目： 共通項目：基本属性(性、年齢、収入、就学年数、就労の有無)、世代間援助項目(提供・受領)、認知的ソーシャル・キャピタル(以下、認知的SC)、心理的健康(WHO-5)、高次生活機能(老研式活動能力指標:65歳以上)等 川崎市B地区調査:世代性(ジェネラティビティ尺度)、高齢者からの被援助経験、規範意識尺度、

(3) 分析： 分散分析により、「世代(若年層、中年層、高年層)」および「地域(世代間交流事業推進の有無)」と「世代間援助(提供と受領)」との関連を検証した。次いで、マルチレベル分析により、世代間交流活動の広がりや地域への信頼に及ぼす影響について検討した。さらに、共分散構造分析を用いて、個人の属性・特徴および地域特性と「世代間援助の意識や行動」を説明する「世代間援助円環モデル」を作成した。

研究 2. 世代間援助効果の検証

(1) 方法：研究1における埼玉県A市調査と同一の対象者に対して追跡調査(2時点:初回調査=T1, 追跡調査=T2)を実施した(2016年11月~12月)。

(2) 調査項目：基本属性(性、年齢、就学年数、就労の有無)、世代間援助項目(提供・受領)、心理的健康(WHO-5)等

(3) 分析：年代別に共分散構造分析の交差遅れ効果モデルを行い、「世代間援助(提供・受領)」が心身の健康および認知的SCに及ぼす影響を検証した。

研究 3 「世代間援助の円環モデル」の構築

多領域(脳神経科学、精神医学、公衆衛生学、老年学、子ども学、社会学、社会福祉学、心理学、経営学、宗教学、文化人類学等)の有識者(20人)を対象にしたインタビュー調査およびワーキング・グループによるディスカッションを行った(2015年10月~2016年2月)。有識者間での議論に基づき、「世代間援助の円環モデル」の構築に向けて、地域高齢者26人に対するインタビュー調査を行った。その中で、6人(女性2人、男性4人)には2回、15人(男性9人、女性6人)には3回にわたるインタビュー調査を実施した。インタビューデータについては、複線径路・等至性モデル(以下、TEM)による分析を行った。

4. 研究成果

研究 1-1. 「地域における世代間援助の現状と課題」抽出および「地域における世代間援助尺度」作成

自由記述データを分類したところ、非親族間の世代間援助の授受の多くは、育児、職場、地域、災害などの特定の場面に限られる事が明らかにされた。さらに、直接的な援助には至らないものの、相手を気づかたり心配したりする「配慮」が特徴的に抽出された(図1)。本結果をもとに作成した「世代間援助提供尺度」項目案および「世代間援助受領尺度」項目案について、それぞれ因子分析の結果から1因子構造が抽出された。各尺度の係数

は 0.93、0.93 であり、十分に高い信頼性が示された。

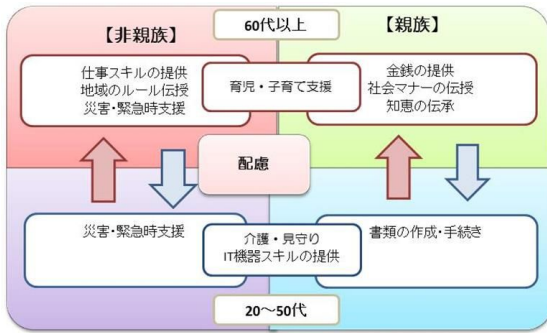


図 1. 分類結果

表 1. 世代間援助提供項目

項目	因子負荷量
元気づける	0.89
話し相手になる	0.86
心配ごとや悩み事を聞く	0.85
それとなく気づかたり見守ったりする	0.85
思いやったり気を配ったりする	0.84

表 2. 世代間援助受領項目

項目	因子負荷量
元気づけてくれる	0.88
話し相手になってくれる	0.86
心配ごとや悩み事を聞いてくれる	0.81
それとなく気づかたり見守ったりしてくれる	0.89
思いやったり気を配ったりしてくれる	0.85

研究 1-2. 世代間援助に関する初回調査

(1) 世代間援助の世代差

「年代」を独立変数、「世代間援助」を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、「世代間援助提供」および「世代間援助受領」において「年代」の主効果が認められた。多重比較により、若年層に比べて中・高年層の世代間援助提供・受領の得点が高いことが示された(それぞれ $p < .01$; $p < .05$)。

(2) 世代間援助の地域差

一要因分散分析により「世代間交流事業推進の有無」と「世代間援助」との関連を検証したところ、世代間交流事業非推進地区(埼玉県 A 市)よりも世代間交流事業推進地区(川崎市 B 区)において、「世代間援助受領得点」および「世代間援助提供得点」がそれぞれ有意に高いことが認められた($p < .05$)。

次いで、世代間交流事業推進地区(川崎市 B 区)において 2004 年度から実施されている世代間交流活動「りぷりんと」に着目し、活動の広がり地域信頼に及ぼす影響を確認するために、「地域への信頼感」を従属変数、りぷりんと活動の継続期間および活動の種類を独立変数とするマルチレベル分析を実施した。その結果、地域レベルにおいて、「りぷりんと活動の継続期間」が「地域への信頼」の向上に寄与することが示された(表 3)。

表 3. 地域への信頼に影響する要因

	Coeff.	SE	P Value
地域レベル			
りぷりんと活動の継続期間	0.13	0.05	0.02
りぷりんと活動の種類	-0.08	0.05	0.15
個人レベル			
性別	0.02	0.06	0.74
りぷりんと活動の認識度	0.25	0.09	0.01

(3) 世代間援助円環モデルの検証

川崎市 B 区調査対象者に対して年代別にパス解析を行った。有意とならないパスを消去しながら、分析を行ったところ最終的にそれぞれ十分に採択可能な数値が示された(若・中年層モデル: $\chi^2=39.59$, $p=0.02$, CFI=0.98, RMSEA=0.04, 高年層モデル: $\chi^2=28.08$, $p=0.14$, CFI=0.99, RMSEA=0.04)。

分析の結果、両モデルともに、「世代間援助の授受」が「世代性」を介して「心理的健康」および「認知的 SC」に影響することが示された。また、「若・中年層モデル」では、「高齢者からの被援助経験」が「世代間援助の授受・提供」に寄与することが示された(図 2)。一方で、「高年層モデル」では、「高次生活機能」が「世代間援助の提供」に寄与することが明らかにされた(図 3)。

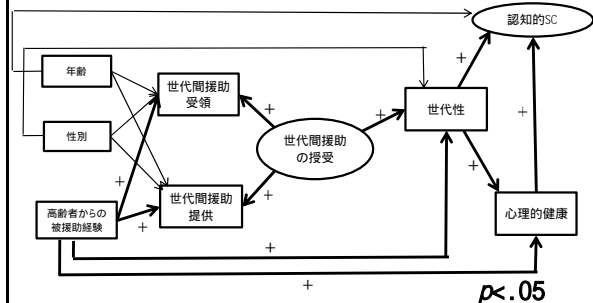


図 2. 世代間援助円環モデル(若・中年層モデル)

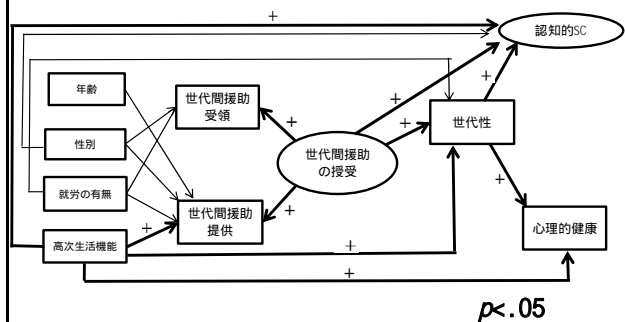


図 3. 世代間援助円環モデル(高年層モデル)

研究 2. 世代間援助効果の検証

(1) 若・中年層における世代間援助効果

年代別(20~39歳:若年者/40~64歳以上:中高年者)に「世代間援助の授受」と「心理的健康」および「認知的 SC(一般的信頼、互酬性)」との継時的な関連を検証するために、多母集団の交差遅延効果モデルによるパス解析を行った。有意とならないパスを消去しながら分析を行った結果、「世代間援助の授

受」と「心理的健康」および「互酬性」との相互因果モデルについて、十分に選択可能な適合度(それぞれ $\chi^2=8.89$, $p<0.99$, CFI = 1.00, RMSEA=.000; $\chi^2=11.27$, $p<0.42$, CFI = 1.00, RMSEA=.002)が示された。

まず、「世代間援助受領」と「世代間援助提供」との関連について見ると、20-39歳(若年者)では、「世代間援助受領 T1」から「世代間援助提供 T2」への正のパスが示された。40-64歳(中高年者)では、「世代間援助受領 T1」から「世代間援助提供 T2」への正のパスとともに、「世代間援助提供 T1」から「世代間援助受領 T2」への正のパスが認められた。

次いで、「世代間援助」と「心理的健康」との相互因果モデルに関して、20-39歳(若年者)では、「世代間援助の受領 T1」から「心理的健康 T2」への正のパスが示された。40~64歳(中高年者)においても同様に、「世代間援助の受領 T1」から「心理的健康 T2」への正のパスが示された(図4)。また、「世代間援助」と「心理的健康」との相互因果モデルに関して、20-39歳(若年者)では、「世代間援助の受領 T1」から「互酬性 T2」への正のパスが示された。40~64歳(中高年者)においても同様に、「世代間援助の受領 T1」から「互酬性 T2」への正のパスが示された(図5)。

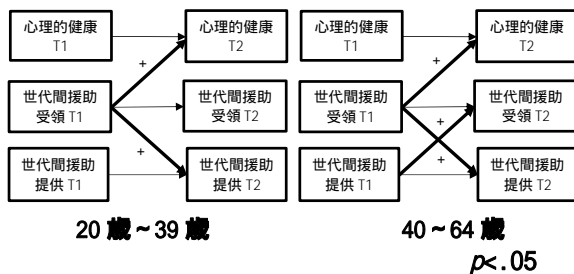


図4.若中年層における世代間援助の授受と心理的健康との関連

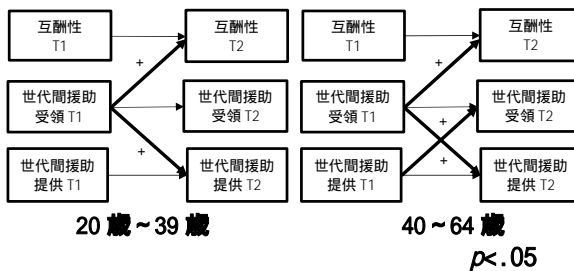


図5.若中年層における世代間援助の授受と互酬性との関連

(2) 高年層における世代間援助効果

年代別(65~74歳:前期高齢者/75歳以上:後期高齢者)に「世代間援助の授受」と「心理的健康」、「高次生活機能」、「認知的 SC(一般的信頼、互酬性)」との継時的な関連を検証するために、多母集団の交差遅延効果モデルによるパス解析を行った。その結果、「世代間援助の授受」と「心理的健康」および「高次生活機能」との相互因果モデルについて、十分に選択可能な適合度(それぞれ $\chi^2=5.40$, $p<0.67$, CFI=1.00, RMSEA =.000; $\chi^2=8.43$,

$p<0.67$, CFI=1.00, RMSEA =.000)が示された。

まず、「世代間援助受領」と「世代間援助提供」との関連について見ると、65-74歳(前期高齢者)および75歳以上(後期高齢者)ともに、「世代間援助提供 T1」から「世代間援助受領 T2」への正のパスが示された。

次いで「世代間援助」と「心理的健康」との相互因果モデルに関して、65-74歳(前期高齢者)では、「世代間援助の提供 T2」から「心理的健康 T2」への正のパスが示された。75歳以上(後期高齢者)では、「世代間援助の提供 T2」から「心理的健康 T2」への正のパスが示された(図6)。また「世代間援助」と「高次生活機能」との相互因果モデルについて、65-74歳(前期高齢者)では、「世代間援助受領 T1」から「高次生活機能 T2」への負のパス、「世代間援助の提供 T1」から「高次生活機能 T2」への正のパスがそれぞれ示された。75歳以上(後期高齢者)では、「世代間援助の提供 T1」から「高次生活機能 T2」への負のパスのみが示された(図7)。

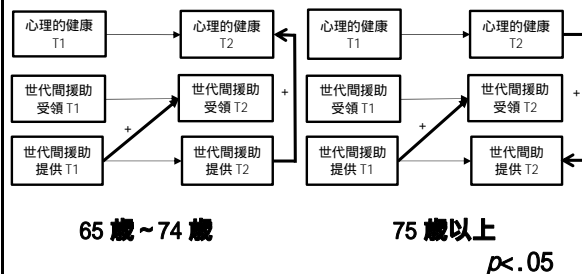


図6.高年層における世代間援助の授受と心理的健康との関連

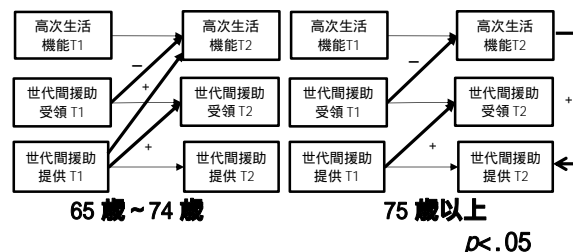


図7.高年層における世代間援助の授受と高次生活機能との関連

研究3.「世代間援助の円環モデル」の構築

地域高齢者に対するインタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに切片化してTEM図を作成した。TEM図からは、自発的な世代間援助に至るまでの過程が明らかにされたとともに、いくつかの課題が存在することが明らかにされた。以上の知見を含めた有識者間の議論を通して最終的に図8に示す世代間援助の円環モデルが構築された。さらに、本モデルをもとに、インタビュー調査において抽出された課題を整理して3つの課題(異世代に対する理解・関心の希薄化、世代関係の喪失、時間・場所の確保)を抽出するとともに、各学問領域の理論・研究を背景にした「多世代共生型事業」の実施に向けた解決策が提案された(図9)。

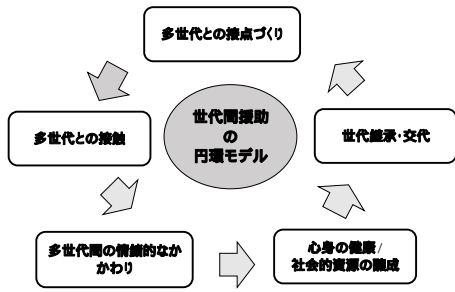


図 8. 世代間援助の円環モデル

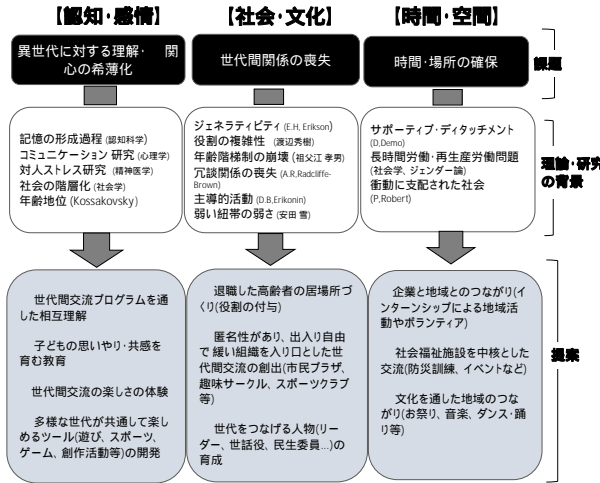


図 9. 世代間援助の課題と多世代共生型事業に向けた提案

考察

地域における世代間援助の現状と課題を把握するとともに、「世代間援助」を包括的に捉えた「世代間援助の円環モデル」を構築し、「世代間断絶」の解消に向けた世代間交流のあり方を提言することを目的とした。研究の結果、日常的な非親族間の世代間援助の多くは特別な場面に限られる一方で、相手を気づかたり配慮するような潜在的なサポートの存在が明らかにされた。次いでパス解析の結果からは、世代間援助の授受は、地域住民の「世代性」の発達を介して、心理的健康および認知的 SC の醸成につながることが明らかにされた。とりわけ、若・中年層の世代間援助には、高齢者からの被援助経験が関連していることが示された。また、交差遅延効果モデルによる共分散構造分析の結果からは、発達段階に応じて、若年期：受領 提供、中年期：受領 提供・提供 受領、高年期：提供 受領へと世代間援助の方向性が変化する円環的な関係性が見いだされた。さらに、地域高齢者を対象にしたインタビュー調査からは、世代間援助を妨げる3つの課題(異世代に対する理解・関心の希薄化、世代関係の喪失、時間・空間の確保)が見いだされた。これらの知見をもとに、多領域の有識者との議論を通して、世代間援助の円環モデル(図 9)を提案するとともに、学際的な理論・研究を背景にした多世代共生型事業のあり方(図 5)が提案された。今後、世代間援助の円環モデルをさらに精査するとともに、本

モデルを基盤とした多世代共生型事業を地域全体で創出することが求められよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

村山陽,長谷部雅美,山口淳,高橋知也,村山幸子,藤原佳典: 世代間援助における互惠性の検討, 日本世代間交流学会誌, 7(1) (印刷中) (査読あり)

Fujiwara Y, Nishi M, Fukaya T, Hasebe M, Nonaka K, Koike T, Suzuki H, Murayama Y, Saito M, & Kobayashi E. Synergistic or independent impacts of low frequency of going outside the home and social isolation on functional decline. Geriatr Gerontol Int. In press. (査読あり)

藤原佳典, 倉岡正高, 長谷部雅美, 南潮, 村山陽, 安永正史, 野中久美子: 多世代の互助・共助による社会システムは構築できるか, 日本世代間交流学会誌, 6(1), 2017, 3-8. (査読有り)

倉岡正高, 長谷部雅美, 野中久美子, 村山陽・安永正史・南潮・藤原佳典: 多世代循環型社会における世代間交流の実装の要件と可能性の検討, 日本世代間交流学会誌, 6(1), 2017, 69-74. (査読有り)

Yasunaga M, Murayama Y, Takahashi T, Ohba H, Suzuki H, Nonaka K, Kuraoka M, Sakurai R, Nishi M, Sakuma N, Kobayashi E, Shinkai S, & Fujiwara Y: Multiple impacts of an intergenerational program in Japan, Geriatr Gerontol Int. 2016, 16(S1):98-109. (査読あり)

村山陽, 高橋知也, 村山幸子, 二宮知康, 竹内瑠美, 野中久美子, 藤原佳典: 高齢者が若者に抱く世代差意識とその対処方略についての探索的研究, 日本世代間交流学会誌, 2014, 4(1), 95-101. (査読あり)

高橋知也, 村山陽, 村山幸子, 野中久美子, 鈴木宏幸, 安永正史, 小池高史, 藤原佳典: 高齢者が若者に抱く世代差意識とその対処方略についての探索的研究, 日本世代間交流学会誌, 2014, 4(1), 61-67. (査読あり) [学会発表](計 15 件)

藤原佳典: 自主企画シンポジウム(企画者・話題提供者)多世代型交流・互助システムの概要, 第 11 回日本応用老年学会, 大阪大学(大阪府大阪市), 2016.10.29.

村山陽, 長谷部雅美, 山口淳, 安永正史, 藤原佳典: 非親族に対する世代間援助の提供と受領の現状, 日本世代間交流学会第 7 回全国大会, 東邦大学看護学部(東京都大田区), 2016, 10.8.

Fujiwara Y, Sakurai R, Yasunaga M, Murayama Y, Ohba H, Nonaka K, Suzuki H, Sakuma N, Kuraoka M, Nishi M, Uchida H, Shinkai S: Long-term effects of an intergenerational program on functional

capacity in older adults, Gerontological Society of America's 68th Annual Scientific Meeting, Las Vegas(USA), 2015, 11, 18-22.

村山陽,長谷部雅美,西真理子,小林江里香,野中久美子,深谷太郎,藤原佳典:地域の世代間援助に関する研究,日本世代間交流学会第6回全国大会,追手門学院(大阪府大阪市),2015.10.3.

安永正史:高齢者のボランティア活動-世代間援助実践報告,日本世代間交流学会第6回全国大会,追手門学院(大阪府大阪市),2015.10.3.

藤原佳典,倉岡正高,長谷部雅美,野中久美子,南潮,安永正史,村山陽,高橋知也:地域包括ケアシステムにおける世代間交流の現状と課題.日本世代間交流学会第6回全国大会,追手門学院(大阪府大阪市),2015.10.3.

安永正史,村山陽,藤原佳典(2015)地域在住の高齢者を学習支援ボランティアとして活用する上での役割と課題,日本世代間交流学会第6回全国大会,追手門学院(大阪府大阪市),2015.10.3.

倉岡正高,長谷部雅美,野中久美子,村山陽,安永正史,南潮,藤原佳典:多世代・多分野連携による相互扶助コミュニティ構築に向けた研究(2),第74回日本公衆衛生学会総会,長崎ブリックホール(長崎県長崎市),2015.11.4-6.

Fujiwara Y: Overview of Intergenerational issues in Japan, Workshop Session IV, The 18th Generations United International Conference, Honolulu(USA), 2015.7.21-24.

村山陽,長谷部雅美,西真理子,小林江里香,野中久美子,深谷太郎,藤原佳典:地域における世代間援助の受領および提供と高齢者の精神的健康との関連,日本老年社会学会第57回大会,パシフィコ横浜(神奈川県横浜市),2015.6.

村山陽,竹内瑠美,山口淳,藤原佳典:地域住民によるソーシャル・サポートに関する研究.日本発達心理学会第25回大会,東京大学(東京都文京区),2015.3.20-22.

山口淳,村山陽,竹内瑠美,藤原佳典:地域住民によるソーシャル・サポートに関する研究.日本発達心理学会第26回大会,東京大学(東京都文京区),2015.3.20-22.

Murayama Y, Takahashi T, Murayama S, Ninomiya T, Suzuki H, Yoshida H, Kawai H, Yoshida H, Obuchi S & Fujiwara Y: Factors associated with miscommunication toward children among the elderly, 第25回日本疫学会学術総会,ウインクあいち(愛知県名古屋),2015.1.21-23.

Murayama Y, Takahashi T, Murayama S, Ninomiya T, Suzuki H, Yoshida, H, Obuchi S & Fujiwara Y: Factors associated with dis-communication toward children among

the elderly, Gerontological Society of America's 67th Annual Scientific Meeting, Washington(USA),2014.11.

Murayama Y, Yasunaga M, Takeuchi R, & Fujiwara Y: The effect of intergenerational program in an elementary school on the attitude toward community activities in their junior high school days, 6th Annual Meeting, International Society for Social Capital research, Auckland(New Zealand),2014.6. [図書](計5件)

村山陽:子どもとふれ合うことともなう高齢者の感情体験,『世代間交流の理論と実践』シリーズ 第2弾(草野篤子ほか編),三学出版,2017(印刷中)

藤原佳典,倉岡正高編著:『コーディネーター必携 シニアボランティアハンドブック』,大修館書店,2016.65

村山陽:地域における世代間交流事業の現状と課題,社会・人口・介護からみた世界と日本, pp37-56(松本誠一ほか編),時潮社,2014.7.

村山陽:読み聞かせボランティアの世代間交流のエビデンス:エビデンスで振り返る「りぷりん」と, pp.225-250(藤原佳典監修),ライフ出版社,2014.12.

藤原佳典:世代間交流による介護予防実践ガイド.『完全版介護予防マニュアル』(鈴木隆雄監修), pp99-133, 法研, 2015.

6. 研究組織

(1)研究代表者

村山 陽(Yoh Murayama)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 研究者番号:90727356

(2)研究分担者

藤原 佳典(Yoshinori Fujiwara)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長 研究者番号:50332367

(3)連携研究者

倉岡 正高(Masataka Kuraoka)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 研究者番号:50596848

安永 正史(Masashi Yasunaga)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 研究者番号:00541419

大場 宏美(Hiromi Ohba)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 研究者番号:70565572